

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：27103

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16685

研究課題名（和文）日本近現代文学の視覚文化論的研究

研究課題名（英文）Studies on Visuality in Modern Japanese Literature

研究代表者

坂口 周 (Sakaguchi, Shu)

福岡女子大学・国際文理学部・准教授

研究者番号：20647846

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代文学の様式と写真・映画・漫画・アニメといった近代特有の視覚表現の発展との間には密接な関係があるという考えにもとづき、具体的な作品に現れている「視覚性」の分析を通して近代文学史を読み直す作業を行った。二〇世紀前半の作家たちによる「共感」の美学に対する問題意識と映画の登場が切り開いた潜在意識的運動の心理への関心とが協働していたこと、戦後文学に散見される「無」の視覚的表現と実存哲学に基づく「想像力」論の流行との関係、現代文学特有の主体性の描かれ方とビデオゲームの登場による虚構世界の経験の仕方との繋がりなど、複数の新しい主張を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、「視覚性」の変化を辿ることで近代以降の世界像（や人間像）それ自体がいかに変化してきたのかを領域横断的に問い、文学研究の領域から総合的な人間学へと議論を展開していく道筋を作った点にある。従来の文学研究の枠組では明かすことが困難だったイメージや概念の影響関係が、その文学史の形成においても決定的に作用していることを明らかにした。また、文学的知識を伝達する形の教養教育が難しくなる見通しにあって、今後の人文学研究の新しいあり方の一つを示した点は、本研究の社会的意義といえる。

研究成果の概要（英文）：This research is based on the idea that there is a correlation between forms of modern literature and the development of modern visual media such as photography, cinema, manga, and animation. It sought to re-examine the history of modern literature through the lens of 'visuality' as exemplified in particular texts and revealed the following: how the early twentieth century authors found the concept of 'empathy' problematic and the subconscious sense of unity laid out in the contemporaneous film theories; the pairing of the post-war novels' inclination toward allegorical visualization of "nothingness" with the concept of 'imagination' in existential philosophy; and how the unique subjectivity of main characters represented in modern literature is being linked to the advent of video games in which the players experience the world differently due to their new perspective.

研究分野：日本文学

キーワード：近現代文学 文学理論 視覚性 映像文化 想像力 世界

1. 研究開始当初の背景

文学と「視覚文化」の関係については以前より、明治 20～30 年代以降の近代西洋絵画の流入と近代小説の形式による「描写」の発展との影響関係を考察する研究や、書籍の装丁や挿絵と物語の内容との関係を考察する研究には十分な蓄積があったといえる。しかし、絵画以外の視覚メディアと大正時代以降（現代に至るまで）の文学との相関性を広義の「視覚性」の観点から切り込む考察は不足している状況があった。いっばうで個人的業績として、既に正岡子規の提唱した「写生句」の理論のなかに、通説である絵画の影響以外に同時代に登場した映画メディアの美学が反映されていることを証する議論を行っていた。その成果を起点に対象領域を拡大すれば日本近代文学史の理解に新しい観点をもたらすことが可能であるという見通しにより本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究は、近現代文学の発展を、20 世紀に現象した種々の「視覚文化」あるいはそれを下支えた「科学知」や「技術知」との連係の中に置き直すことで、通説の文学史の書き換えを目指した。とりわけ大衆の規模の生活環境の変化に預かった「動画」に属するジャンル（映画、テレビ、アニメーション、そしてビデオゲーム）に注目した。狭義の社会学的研究が発表媒体の流通の問題や作品中に登場する各メディアそれ自体の歴史的背景を調査するのと異なり、時代の文脈によって構築された視覚的認識の体系を意味する「視覚性」をキーワードとして、プロットや文体、テキストの空間構造等、言語文化の内面とメディア技術の照応性に焦点を当てることで、より深層の認識体系の変遷を明らかにすることに目的を置いた。

3. 研究の方法

研究スタイルとしては人文学研究において基本である文献及び映像資料の徹底した調査と分析・推論による仮説構築の繰り返しに、定期的な執筆を交えていく形を踏襲した。しかし本研究の方法を特徴付けるのは、そのような手順の水準ではなく、領域横断性である。「研究開始当初の背景」に記したように、俳句と映画の構造的関係を論じた正岡子規論で得た問題提起の仕方を応用して、異なる時代や文学者だけでなく、異なる表現媒体と文学の関係を表象文化論や比較文学など海外の研究動向も含めた周辺分野と併せて論じる方法の確立を試みた。それにより、かねてより必要が言われているが現実には実現の容易ではない「領域横断」的な研究の実践例の一つとなることを期した。また、研究対象の絞り込みに関しては、「視覚性」の系譜を体系的に把握するのが目的とはいえ、時系列順に逐一調査を行うことの効率面における困難から、各時代において特徴的な事象、例えば 1930 年代から 50 年代にかけては発声映画、また 60 年代以降はその衰退（あるいはテレビの台頭）、1980 年代はビデオゲームの流行といった各々の文脈と密接な関係を持って見える作品を選び、時系列順には構わず個別の研究を並行して進める方法を採用した。

4. 研究成果

研究の性格上、各論文や発表と研究成果が一对一の対応をしているわけではないので、部分的に関係性の強い論点を横断的に束ねると概ね以下の 4 つの内容に分類できる。

(1) 19 世紀末から 20 世紀前半まで、当時の心理学の代表的成果である「潜在意識」による観念の運動やその象徴的な身体現象である「催眠」による心の神秘の理解、また客体に対する主体の心的同化作用（主客同一／共感）の美学（感情移入）の急速な発展など、多くの先進的な作家（特に「夢見」の写実的描写の探求に強く惹かれていた作家たち）が依拠していた言説群を分析し、彼らの小説が一貫して主体の知的な「意志」の力を積極的に衰弱させる方法的態度を実践していることを示した。同時に、その背後には、写真から映画へと発展した視覚的運動描写と、その受容美学の発達が基底的に作用していることを明かした。また、この議論の延長として、散歩（歩行）には、緊張を解除し「注意」を散らすことで心的活動を開放する神秘的効用（異界の幻出）があるという知識から同時代の小説が好んで描いていた事実の調査と分析を通して、明治 30 年代以後の小説にあっては、心理は単純に自立した思考ではなく、身体によって無意識的に規定されるものとして理解される傾向が強かったことを明らかにした。その他、大正中期から「純文学」作家が先導する探偵小説の流行も、犯罪を犯罪として確定する「意志」（動機）を特定することの困難な犯罪的行為を描くことで、潜在意識的な心理の働きを探求しようとする文学現象として同列に見なす必要を示した。さらに本事業期間の終了間際の成果として、以上のような四半世紀に亘る様式的な傾向が、同時代に西洋近代より流入した「世界文学」の理念に対する抵抗の方法として形成されたと考える新しい議論の枠組を整えた。それにより、さらに広い国際的（比較文学的）かつ学際的見地から日本近現代文学の様式史を読み直す今後の研究への道筋を示した。

(2) 本来触知不能な「無」を寓意的に視覚化するという描写が戦後文学及び現代文学において重要なテーマの一角を占めるようになる。その背景には、「無」の概念を理論の中心に組み込んでいる実存主義の思想界における広範な流行があったこと、それを小説の具象的な表象の能力によって捉えることが一部の戦後作家にとっての大きな課題となっていたことを明らかにした。そして、この「無」の表象の問題と切り離せないのが、サルトルによって「無」に依拠する能力として特権的に扱われた「想像力」論の戦後日本における展開と文学者による受容である。本研究では特に1950年代後半から60年代の文学界を率先し、「想像力」を鍵概念として掲げていた大江健三郎による「無」の表象とその変化を分析し、続いて1980年代以降の文学界を代表する村上春樹による「無」の表象の特徴と比較することで、文学における「想像力」の問題が戦後から冷戦後まで、どのように継続し、変化し、また断続し、やがて主体性や世界の「消滅」を描く方法に取って変わられていったのかを系譜付けた。また、マンガや映画の領域における個別作家や作品の分析を通して、「無」の表象の課題が文学領域以外にも様々な様態で派生していること、それが戦後の表現において非常に大きな「視覚性」の体制を築いていること、そして21世紀現在の表象文化の思考の礎となっていることを論じた。

(3)(2)に連続する論点になるが、村上春樹の『世界の終わり』とハードボイルドワンダーランド』(1985)を、主人公が脳の無意識領域(想像力の拠点)を暗号化のために提供する「計算士」として生活する現実世界と、その主人公の「無」に晒された無意識領域内の世界を重ね合わせた二重構造をとることで、新しい時代の解離的な主体性なき主体モデル(現代の信用スコア社会にも通じる情報計算論的主体)を先駆的に提示した作品と読んだ。それを起点に、新自由主義的あるいは消費社会的なパラダイムに対して、自由意志の「消滅」をもって批判的に対峙する1990年代以降の一連の小説を理解する枠組みを作った。この計算論的(あるいは解離的)主体性が積極的に描かれるようになった理由の一つを、同時代以降に大衆的視覚文化の中心に躍り出たビデオゲームの美学によって理論的に説明することが、本研究による「視覚文化論」的な特に新しい見地である。ただし、具体的な調査は未だ不十分な部分が多く、今後の継続した取り組みが必要である。

(4) 本事業期間の後半から延長年度にかけて、当初計画としては予定していなかった「世界」イメージの近現代文学史における変遷を探求する新たな課題を見出した。欧州で19世紀始めに「世界文学」の認識が登場した際に、その「世界」の意味に近代哲学における「世界」概念の発展が色濃く反映していることに注目し、遅れて「世界文学」の一員となるだけでなく、それを超えることをも目指してきた19世紀末以降の日本文学が前提とした「世界」イメージの推移を捉えることで、これまで視覚メディア技術との関係で明らかにしてきた日本近現代文学の様式変遷をさらに広い見地から意味づけることが可能と考えた。延長年度には、1980年代文学に観察される「世界」の語の濫用や、戦後文学における「世界文学」派の復活、さらに(1)の末尾においても言及したように、19世紀末から20世紀初頭にかけての「共感の美学」と「世界文学」の理念との対立関係など、個別の文学的事象の調査に力を入れ、文学史的「世界」概念の変遷の本格的な研究(次事業)に進むための基本的な地図作成を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 坂口周 | 4. 巻 第52巻第5号 |
| 2. 論文標題 坪内祐三『慶応三年生まれ 七人の旋毛曲り 漱石・外骨・熊楠・露伴・子規・紅葉・緑雨とその時代』再読 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 ユリイカ | 6. 最初と最後の頁 398-406 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 坂口周 | 4. 巻 第50巻第13号 |
| 2. 論文標題 朦朧と幻想の山本直樹 『堀田』を中心に | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 ユリイカ | 6. 最初と最後の頁 205-212 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 坂口周 | 4. 巻 第1号 |
| 2. 論文標題 消滅の寓意と 想像力 の問題 大江健三郎から村上春樹へ | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 文学+ | 6. 最初と最後の頁 146-180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 坂口周 | 4. 巻 第49巻第8号 |
| 2. 論文標題 「姦通」の遠近法 原作小説と清順映画：内田百閒/泉鏡花/竹久夢二 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 ユリイカ | 6. 最初と最後の頁 172-180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 坂口周 | 4. 巻 第12号 |
| 2. 論文標題 梶井基次郎の歩行 「路上」における空漠の美と抵抗 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 表象 | 6. 最初と最後の頁 184-200 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 坂口周 |
| 2. 発表標題 「世界文学」論の時代の日本文学 「世界」概念とその表象の変遷を追って |
| 3. 学会等名 日本比較文学会北海道支部大会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 坂口周 |
| 2. 発表標題 現代文学と意志の問題 非形式的な「世界」へ向かって |
| 3. 学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同 国際研究集会 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 坂口周 |
| 2. 発表標題 「世界文学」という自己意識の展開 「世界」と「セカイ」の相関性について |
| 3. 学会等名 シンポジウム「世界文学の現在」 (招待講演) |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|-----------------------------|--------------------|
| 1. 著者名 坂口周 | 4. 発行年 2016年 |
| 2. 出版社 慶應義塾大学出版会 | 5. 総ページ数 445ページ |
| 3. 書名 意志薄弱の文学史 日本現代文学の起源 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|